

第10回 国際日本学シンポジウム

日 時	2008年7月5日(土)・6日(日)
場 所	お茶の水女子大学 (〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1) 共通講義棟2号館201号室
テーマ	【5日】人類・食・文化 【6日】源氏物語の千年 ～日本と欧米における源氏絵の旅～
主 催	お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」、比較日本学教育研究センター、女性リーダー育成プログラム(人社系)
後 援	21世紀型文理融合リベラルアーツプログラム

7月5日(土) 第1日目 [Session1] 人類・食・文化	
<p>近年、世界中で「食」に対する関心がますます高まりつつある。午前中は世界の食文化をリードするフランスから専門家を招き、文理融合の視点から人間と「食」、「食」と文化の問題について語っていただく。午後は日本の米と雑穀の食文化について、海外からの視点や科学的研究方法論から検証し、現在注目されている食糧問題や栄養問題(メタボリック症候群)などに対して、日本学の立場から国際発信できる対応策を導き出す。</p>	
10:00-12:45 【午前の部】	<p>【司会】 森山新 (本学比較日本学教育研究センター長) 【挨拶】 郷通子 (本学学長)</p> <p>〈講演〉 「食物、人間、そして神聖なるもの」 フランソワーズ・サバン (日仏会館フランス学長) 「農業害虫の生物的防除ーパスツールから遺伝子組み換え作物までー」 マクシム・シュワルツ (パスツール研究所名誉所長、元フランス食品衛生安全庁ディレクター)</p>
14:00-18:00 【午後の部】	<p>～米と雑穀の日本文化～ 【司会】 村田容常、古瀬奈津子 (本学教授)</p> <p>〈研究発表〉 「古代日本人は米をどれぐらい食べていたか？」 シャルロット・フォン・ヴェアシュア (フランス国立高等研究院 教授) 「日本の米と食文化」 香西みどり (お茶の水女子大学 教授) 「雑穀の社会史」 増田昭子 (立教大学 講師)</p> <p>〈パネルディスカッション〉 【司会】 村田容常、古瀬奈津子</p>
18:00-20:00	茶話会

7月6日(日) 第2日目

[Session2] 源氏物語の千年～日本と欧米における源氏絵の旅～

源氏物語千年紀に際し、このセッションでは物語にまつわる多様な絵の歴史を通して、この世界屈指の傑作が時空を超えて旅した様を、比較研究的な視点から浮き彫りにする。様々な発表者が各自の研究を通して、その考察と日本、欧米における源氏絵に関する研究の現状を紹介する。

13:00-18:00	<p>【司会】 ロール・シュワルツ＝アレナレス (本学准教授)</p> <p>〈研究発表〉</p> <p>「源氏物語の絵画性」 清水婦久子(帝塚山大学 教授)</p> <p>「『源氏物語』竹河巻の絵画化～『あさきゆめみし』を出発点として～」 原山絵美子(お茶の水女子大学大学院 博士後期課程)</p> <p>「フランスにおける源氏物語～テキストへの視線と絵画への視線～」 エステル レジェリー＝ポエール (フランス国立東洋言語文化研究院(INALCO) 准教授)</p> <p>「米国における源氏物語イメージの美術史的研究活動」 渡辺雅子 (メトロポリタン美術館アジア部門 主任研究員)</p> <p>〈パネルディスカッション〉</p> <p>【司会】 平野由紀子 (本学教授)</p>
-------------	---

【Session1】 人類・食・文化

まず、本セッションを設けることになった趣旨を説明したい。

「食」は人間にとって最も根本的で身近な問題である。現在、世界中で「食」に対する関心がますます高まりつつある。日本においても、「食」に関する諸問題が、食料自給率をはじめ、栄養問題など、国家政策から生活面にいたるまでさまざまに議論されている。これらの議論の背景には、西洋科学文明の行き詰まりによる環境問題の深刻化やライフスタイルの変化などがあり、現代社会は文明の大きな転換点に立っていると見える。

こうした「食」の現代的課題を解決し世界に発信していくためには、世界的な視点で日本の「食」の問題を考えていくことが重要であるし、一方、従来の方法論とは異なる新しい視点で、「食」の問題に対処していくことが必要だと考えられる。数量化に象徴される栄養科学の視点からだけでなく、人文学からの視点を複合的に総合した文理融合の視点によってこそ、「食」の問題解決に向かうことができると言えよう。また、現代的課題を解決するにあたっては、現代だけを考えるのではなく、日本の食文化を歴史的に見直していくことによって、その手がかりを得ることができると考えられる。

本学の比較日本学教育研究センター主催の国際日本学シンポジウムも第10回となり、記念の年を迎えた。今年度は、文部科学省が行っている大学院教育改革支援プログラムに本学から採択された「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」との共催である。本学では国際日本学、比較社会文化学分野の研究者と食物栄養学分野の研究者が合同で「食」についての研究プロジェクトを立ち上げて、教育面でも文理融合リベラルアーツの中で、「色・音・香」という授業を合同で担当している。

このような本学の取り組みの一環として、今回の国際日本学シンポジウムにおいて、「人類・食・文化」のセッションを設けることになった。午前の部においては、世界の食文化をリードするフランスから専門家の方をお招きし、世界的な視点から「食」と文化の問題について、また、文理融合の視点から人間と「食」の問題についてお話ししていただく。

そして、午後の部においては、日本の主食と言える「米」とこれまた重要な食糧である「雑穀」の関係について、「米と雑穀の日本文化」というテーマでシンポジウムを行う。これは、米と雑穀について、文理融合の視点をいかにしながら、歴史的に日本文化を見直していくことによって、「食」の現代的諸問題解決の手がかりを得ようとするものである。

午前の部にも途中で質疑応答の時間を設け、最後には報告者全員によるパネルディスカッションを行い、さまざまな角度から、「米と雑穀の日本文化」について考察することにしたい。

【午前の部】(10:30-12:45) 講演

1. フランソワーズ・サバン(日仏会館フランス学長、中国史)

「食物、人間、そして神聖なるもの」

「宗教を語るものは食事を語る」

人間は、食物を道具化することによって、神聖なるものに到達し、神聖なるものと融合しまたはそれと一体化する。また、付随的に、自分を隣人から区別する。

2. マクسيم・シュワルツ(パスツール研究所名誉所長、元フランス食品衛生安全庁ディレクター、分子生物学)

「農業害虫の生物的防除—パスツールから遺伝子組み換え作物まで—」

パスツールの微生物による昆虫の個体数コントロールは、遺伝子組み換え作物開発の道を開いた。人類は何世紀にもわたる努力の末、遺伝子組み換え作物によって、害虫に耐性を持つ作物を栽培できるようになった。遺伝子組み換え作物の使用については論争が続いているが、遺伝子組み換え作物は、世界の食糧生産問題に関して大いなる可能性を提供するものである

【午後の部】(14:00-18:00) シンポジウム「米と雑穀の日本文化」

1. シャルロット・フォン・ヴェアシュア(フランス国立高等研究院教授、日本史)

「古代日本人は米をどれくらい食べていたか」

古代人の米消費は、土地の広さと地質、地理的所在場所、家族の構成などによって、大きく異なり、1:4もの大差があった。しかし、平均としては、1年に4分の1(25%)ぐらいいは米を食べていたのではないかと考えられる。

2. 香西 みどり(お茶の水女子大学自然・応用科学系教授、調理科学)

「日本の米と食文化」

日本に伝来した米は温帯ジャポニカ種といわれる比較的寒さに強いもので、稲作には大量の水と、耕作技術を必要とした。日本人の食事文化は、米に執着したもので、穀類を用いた穀醬類の調味料が発展し、ブタなどの食用家畜が欠落していた。

3. 増田 昭子(立教大学文学部講師、民俗学)

「雑穀の社会史」

日本社会における雑穀の重要性を主張する。1961年の農業基本法によって、農業の多様性が否定された。しかし、農業の多様性を維持することによって、食糧自給率をあげ、食材独自の味を楽しむためにも、雑穀を栽培し、「農と食」の多様性文化を奨励するべきである。

【パネルディスカッション】

木村茂光東京学芸大学教授(日本史、畑作・雑穀の研究者)

日本人は米をどれくらい食べていたのか、について時代による違いはあるのか?戦争の時代に米が普及することが、中世でも近代でも知られている。日本では古代の新嘗祭でも、米の新嘗だけではなく、稗の新嘗も行われており、年中行事には雑穀が多く使われている。

三浦徹お茶の水女子大学理事(イスラム史)

サバン氏の講演をうかがうと、米や麦などの主食にはタブーが見られない。

日本人はなぜジャポニカ種の米に執着したのか。

香西みどりお茶の水女子大学教授(調理科学)

ジャポニカ種の栽培には大量の水が必要で、日本の風土に合った。また、ねばりのある味が日本人には好まれた。

まとめ:

本日のシンポによって、雑穀の重要性がよくわかったが、日本ではジャポニカ種の米が好まれ、古代から近世にいたるまで、米が税金として選ばれたことも確かである。今回のシンポを第一歩として、米と雑穀について今後も研究を進めていきたい。

【文責: 本学教授 古瀬奈津子】

【Session2】 源氏物語の千年 ～日本と欧米における源氏絵の旅～

このシンポジウムには源氏物語の名場面の数々が美しいカラー写真でスクリーンに映し出された。4人の発表者の多角的な発表を、通して聞くには5時間を要した。ある参加者（八十代の女性）からいただいた礼状を以下に示したい。

スライドを見せて頂く等源氏物語の新発見で私たち三人ともとても楽しい時間でした。最後までお願いながら、お一人のご都合で残念ながら途中退場してしまい心残りでした。「新しい日本学の構築」の報告書を求めてまいりましたので、楽しく読ませて頂いております。
年寄ってから、これ程すばらしい人生になるとは思いませんでした。

清水婦久子氏の講演では『源氏物語千年紀展』（京都文化博物館 4/24－6/8）の展示作品と、国宝「源氏物語絵巻」を扱った。カラーコピーの手元資料には

- ① 伝土佐光吉・源氏物語図屏風（出光美術館）60場面
- ② 狩野氏信（17世紀）源氏物語図屏風 54場面
- ③ 絵入り『源氏物語』若紫巻（1650年）山本春正編
- ④ 土佐光起（1617－91）・源氏物語図屏風（福岡市美術館）

が掲載された。①②は全図、③④は若紫巻の北山の垣間見の図と、須磨巻の海近き住居に雁を見る図が示された。

清水氏の講演は有名な北山の垣間見の場面に、尼君・少納言の乳母・若紫たちの他に雀の子・伏せ籠が描かれるが、さらにどの絵にも必ず桜の花が描かれることに注目する。それは源氏の視線と少女の間にあり、「夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ」の歌によるのである。そして源氏物語がかくも多くの源氏絵を生んだのは、そもそも源氏物語の風景描写の文章が映像として具体化する光景を作ろうとする基本姿勢によっているからである（同氏『源氏物語の風景と和歌』1997年4月 和泉書院）。清水氏のこれまでの研究の上に立つ丁寧な場面説明は非常に説得的であった。

また、大和絵の中の桜、霞、雁、海などは物語本文の歌の素材としてあり、鑑賞者の享受する絵の世界は、和歌の世界をふまえ、その場面はもとより、人物の心情までも察知しうるものであることを説明された。

原山絵美子氏は絶大なファン層をもつ大和和紀の漫画『あさきゆめみし』に親しんだ若い世代として、自分の経験を交えながら発表した。竹河巻は平安文学の研究分野では従来、源氏物語正編41帖と宇治十帖のつなぎの3帖として、巻の構想・人物呼称・和歌および文章の異質性（拙さ）に不審がもたれてきた。

しかし国宝「源氏物語絵巻」には竹河巻から3場面が絵画化されている。それに対し『あさきゆめみし』では巻そのものがカットされている—それはなぜか、という興味深い問いを原山氏は抱いた。時代により、享受者により関心の光のあて方が異なること、しかもどの光にも豊かな内容を顕しうる作品であること、など源氏物語の本質を明らかにする問いとなるに相違ない。今回はいわゆる源氏絵の、藤のかかる松を前に対座する二人の貴公子の詠じた和歌の贈答について、その表現を実証的に考証し、新しい解釈を提出した。勅撰集のみならず私家集の索引類が整う研究環境¹と贈答歌を本質とする褻の歌（日常歌）の研究成果によって、物語内の和歌の注釈は新たな段階に入ったと言えよう。端的に言って従来の注釈書の和歌の解釈には首をかしげたくなるものが少なくない。夕顔巻の五条の小家に咲く夕顔の花は、身分卑しい者の比喻にはなっても源氏の顔を指すわけではないにもかかわらず、その解釈がまかり通る。この点、清水婦久子氏の近刊『光源氏と夕顔』（新典社 2008年）に詳しい。

エステル・レジェリー＝ポエール氏の昨年公刊した豪華本は、部厚い3冊1組の高価なものであるが、3500部完売したという。源氏物語本文はルネ・シフェール訳の全文、それをはさむ形で左と右に、国宝「源氏物語絵巻」をはじめ江戸の土佐絵に至るいわゆる源氏絵を、大小・長短様々に切り取った図柄も含め配置した視覚的に美しい本である。

フランスにおける源氏物語に対する認識はまだ浅く、そのような状況の中でこの本の出現は大きな意味をもつ。ルネ・シフェール訳にはなかった巻毎の登場人物の系図が加えられ、作品理解の第一歩となる点が特筆される。

1 『新編国歌大観』と『私家集大成』、書籍のほか CD ロムあり。『私家集大成』CD ロムは 2008 年 12 月完成。

また、発表の中で紹介された初のフランス語訳を試みた「キク・ヤマタ」（山田キク）への関心は、今後増大するにちがいない。

メトロポリタン美術館の渡辺雅子氏は博士論文に国宝「源氏物語絵巻」を扱った研究者であり、自身の経歴、またアメリカにおける源氏物語という文学の研究、絵巻や源氏絵など美術史の研究について紹介された。

多種多様な源氏絵の中で、近世初期に制作された大がかりな、或る源氏物語絵巻が石山寺のほか、その一部がアメリカやヨーロッパの美術館や個人に所蔵されており、散乱したパズルを集め全体像を求めるのに似た知的興奮を伴う動きがあった（『源氏物語と江戸文化』森話社 2008年5月）。本学のシンポジウムの一週間後、立教大学で開催されたそのテーマのシンポジウムではボエル・渡辺両氏がパネリストであった。また、清水婦久子氏の大きく企画に加わった『源氏物語千年紀展』（京都文化博物館）にもその絵巻の一部が展示された。

文学の研究でいえば、古筆切の研究が想起される。はじめ一冊（一卷）であったものの分断された一葉一葉の所蔵者の在り処、またそれぞれの流転の歴史が明らかにされ、原形復元の完成を目指すのである。

今、概要を書くにあたり、シンポジウムの全体をふりかえって見ると、あらためて「源氏物語の千年—日本と欧米における源氏絵の旅—」と設題したシュワルツ先生の炯眼に深く感服する。また、参加した研究者は文学と美術史の両方の領域のそれぞれの関心事や、真実に迫る方法について学んだ。聴衆は知的また美的満足を味わった。

源氏物語千年紀の実行委員会の企画をはじめ2008年の様々な行事の成功には目を見張るものがあった。年明け東京国立博物館の「宮廷のみやび—近衛家1000年の名宝」があり、国文学研究資料館の戸越から立川への移転記念特別展示「源氏物語千年のかがやき」（思文閣出版 10月）など続いた。王朝の生活、建築、服飾、音楽、書、香、紙、布、などについて、より正確な情報が蓄積されるようになった。また、書物そのものについても新出の大沢本をはじめ多くの写本、版本などが公開され、益するところ大であった。

今年の様々な研究イベントの中で、国宝「源氏物語絵巻」をめぐる留意したいと私の考える最大のことは、その復元についてである。

中古文学会の龍谷大学での春季大会において徳川美術館の四辻氏はX線によって絵の具の材質・分量・その割合などの分析を踏まえた復元と、その科学的な調査により、鎌倉から室町、そして江戸時代にかけて数度に渡る後世の補筆の存在を明らかにした（中古文学82号2008年12月p29）。後世の加筆の存在は今までタブーとされてきたことである。また、そのことは、とりもなおさず、甦った現代の復元絵巻の細部にも、復元する現代の絵師の裁量にまかされた筆の跡がある—ということである。

また、文学としての源氏物語について、フランスにおけるのと同様、日本から「日本文化」として押し付けられるほどには北米に源氏物語は浸透していない—この事実は重要である。

現代のわれわれは一昔前の日本人がそうであったように、そのことをきいて源氏物語が過小評価されたという憤慨したりはしない。ルネ・シフェールの言葉を引用するシュワルツ氏の文章にある通り、ごく少数の優秀な日本学研究者は、ヨーロッパ中心主義ではなく、生きた場所も社会もちがう平安時代の作品の中に、今も昔もかわらない人としての共感を覚える奇跡に打たれるのである。

そのことを私たちは知っているからこそ、一般の人々の中にフランスにおいてもアメリカにおいても源氏物語が浸透していない事実をありのまま受け止めることができる。源氏物語千年紀はたしかに古典に親しみ、それを見直し、現代をより豊かに生きる、大衆的な良い企画であった。一方、現代社会の男女にとって、平安時代の多妻婚は、あまりにもかけ離れた習俗であり、源氏の色好みは理解し易いものではない。時折用いられる「プレイボーイ」という語がどのように光源氏にふさわしくないか、簡潔に正確に説明できる教師は日本にもそう多くはあるまい。その意味では日本の一般の人々の中に源氏物語が浸透している程度も、西村亨氏の言うように²決して深いとは言えないのである。

作者は作品を書くことはできても古典を創ることは出来ない、という言葉は享受する側の重要な働きを明快にとらえる。その意味で源氏物語は日本において何時の世にも読者を得てきた、まぎれもない古典である。しかし文学研究に従事するものとしては、平安時代の制約や制度、価値体系の中における人間の悲喜こもごもを明らかにしたい。なぜなら、それこそが普遍的な感動を時代と空間を超えて伝える最適な方法であると思うからである。

【文責：本学教授 平野由紀子】

2 西村亨『知られざる源氏物語』（大修館書店 1996年1月）